

都市の植民地主義と「棄民」

——寄せ場・野宿の思想と実践からの問い——

原口 剛

1. はじめに——暴力の風景

2012年10月、大阪駅前ガード下で野宿をしていた5人の労働者が少年たちに次々と襲撃され、富松国春さんが暴行の末に虐殺された。事件を報じた新聞記事は、こう伝える。「もう少しで目がつぶれるところだった」と凄惨な事件について語った男性は先月下旬、「もう怖くていられない」と数十年にわたり慣れ親しんだ「寝床」から突然、姿を消した¹⁾。生田武志が著書『<野宿者襲撃>論』で説き明かすように、少年たちの暴力は、社会の奥深くに組み込まれた野宿生活者に対する暴力を代行し、体現させたものであった。それは、1982年から83年にかけて横浜で起きた「浮浪者」襲撃殺人事件以来、過去に幾度となく繰り返され続けた暴力である。2012年の大阪駅前における事件は、そのような暴力がいまなお作動しつづける都市の現実を、私たちに突き付けるものであった。しかし、この凄惨な事件から3年余を経た現在のガード下は、まるで何事もなかったかのような装いをみせている。駅前を中心とする梅田一帯は都市開発の熱狂に沸き、むしろ祝祭的な雰囲気と蔽われている。富松さんは、二度にわたり殺されたというべきではないか。一度目は、少年たちの手によって、生命を奪う殺害として。二度目は、富松さんたちがそこで確かに生きていたという記憶の忘却として。

このような路上の暴力は、大阪駅前のみ限定されるものではなく、また、日本国内だけの現象なのでもない。たとえばアメリカにおいては、貧者や野宿生活者にとっての最たる脅威は、少年たちによる襲撃ではなく、警察の暴力である。ニューヨークやロサンゼルスといった大都市をはじめとする各都市において、高まる一方の警察の暴力の果てに、貧民が殺害される事例が生み出されつづけている²⁾。それは、グローバル化の時代における現代都市が共通して抱える、構造的暴力というべきものだ。西川長夫が積み重ねてきた植民地主義をめぐる膨大かつ緻密な論考に向き合うとき、わたしの脳裏に浮かんだのは、このような暴力の風景であった。現代都市の路上で振るわれる暴力は、かつて西欧列強による現地住民の略奪と虐殺によって植民地を生み出した近代資本主義の根源的暴力と、なんら変わらないのではないだろうか。

西川長夫が現代のグローバル化の過程のなかに植民地主義を見出そうと試みる時、その焦点は国内植民地へと、さらにはグローバル・シティへと結びあわされていく(西川2006)。この論に触発された加藤政洋の論考は、アンリ・ルフェーブルの思想を導きとしつつ、近現代の都市における植民地主義の様態や変容を、いっそう具体的に提示していった(加藤2007)。これら一連の考察は、植民地主義への問いを空間的に多層化させるものであったといえよう。不均等発展論を軸として新たな空間論を展開した地理学者のニール・スミスによれば、資本主義は自身が生存するのに適した空間を、そして、多層的な空間のスケールを創出する(Smith 1984)。

このなかで、資本主義がその本性として有する植民地主義は、地球規模のグローバルな植民地、国内的植民地、都市内植民地といった多層的な空間を、同時並行的に生み出していく。地球規模における中枢と周辺の間を視座に据えながら、国内植民地や都市内植民地へと植民地主義論の射程を広げていった西川や加藤の論考が浮き彫りとしたのは、まさにこの論点であった。

それでは、都市内の植民地が地球規模の植民地や国内的植民地と不可分のものであるとするならば、私たちはそれらの相互関係性や、近現代におけるそれらの布置関係の変容を、いかに具体的に把握することができるだろうか。この課題を念頭に置くと、「場所」という概念が重要性を帯びてくる。加藤が論じるように、場所とは「さまざまな意図が絡み合い、政治的な力関係に左右されながら創出されるもの」である（加藤 2007, 125 頁）。都市内植民地として創出された場所が国内的植民地や地球規模の植民地との相互関係性を有しているとするなら、ひろく植民地主義を問う視座を得るための手がかりは、そのような場所の系譜にこそ埋め込まれているはずだ。

大阪の釜ヶ崎は、日雇労働者が集住する都市のインナーシティのエリアであり、寄せ場という呼称で知られている。釜ヶ崎は、まさに都市内植民地として生みだされた場所であり、そこでは長年にわたる闘争のなかで数々の思想や言葉、実践が積み重ねられてきた。これらの思想に向き合うことで、現代都市において植民地主義を批判的に捉える視座を探ることができるのではないか。

2. 都市内植民地としての寄せ場

寄せ場では、この地の闘争や支援活動に携わってきた人々によって、数多くの言葉や思想が編み出されてきた。それらは、寄せ場という空間が都市内の植民地にほかならないことを、多様な角度から照射している。ここで、小柳伸顕『風と大地と太陽と——アイス、中南米、釜ヶ崎との出会い』（1993 年）を導きとして、寄せ場が有する植民地的現実を探ってみよう。小柳は、1968 年から釜ヶ崎でさまざまな困難を抱えた子どものケースワーカーの活動に携わり、釜ヶ崎キリスト教協友会のメンバーとして、日雇労働者に寄り添いながら支援活動や闘争に取り組んできた。本書には、小柳がその活動のなかで経験した出来事や、出会った人々への思いが綴られている。たとえば越冬闘争について、小柳は次のように述べる。

広さ 0.62 平方キロメートルの日雇い労働者の街釜ヶ崎。人口は単身労働者約二万。不況と寒さが重なる年末には、行路死亡が三〇人。東京山谷、横浜寿町、名古屋笹島でも例年になく野宿者が多い。日雇い労働者の街を除いて、日本のどこに路上で二〇〇人も三〇〇人もが野宿しなければならない街があるだろうか。（同上 217 頁）

「一人の死者も出さな」という越冬闘争のスローガンが示すように、多数の労働者が極寒のなか野宿を強いられる状況にあって、路上で生命を奪われることなく冬を越すこと自体が、釜ヶ崎においては生存を賭した闘争としてある。この闘争において支援者たちは、労働者の「野たれ死に」というあまりに過酷な現実と向き合わざるを得ない。

人は、野宿する労働者の群れを見て、「怠け者」呼ばわりするかもしれない。しかし、野宿する労働者の個人史を聞くと、かれらこそ高度経済成長政策の犠牲者である。健康なときは、精いっぱい働かせ、高齢化、病気がちになると、「そんな労働者はいらない」と企業は使い捨てである。行政、福祉政策もそれに追い討ちをかける。労働力の再生産につながらない福祉は無駄とばかり、切り捨てていく。企業や行政にとって、釜ヶ崎の日雇い労働者は、人間ではなく単なる「労働力」にすぎない。(同上 216 - 217 頁)

このような筆致をもって小柳は、かれら労働者を死に追いやる社会の構造的暴力をあぶり出し、告発する。のみならず、本書の副題「アイヌ、中南米、釜ヶ崎との出会い」に表わされているように、寄せ場の過酷な現実を直視するなかで、そこに国内の植民地と地球規模の植民地に連なる地平を見出していくのである。本書は、1990年11月、名古屋地方裁判所でのTさんの第三回公判を傍聴した体験記からはじまる。「わたしが、Tさんの公判傍聴を続けようとおもった理由は二つありました。一つは、Tさんが寄せ場の労働者であったこと。二つはかれがアイヌ民族であったこと」(同上 16 頁)。Tさんは名古屋の則武公園にて知り合った、同じく日雇労働者のOさんからの度重なる民族差別発言に憤り、ついに傷害致死をまねいてしまった。これをアイヌ民族差別の問題として提起すべくTさんの裁判支援が取り組まれ、小柳もその支援に参加したのである。1991年2月の最終公判の本人質問を聞くなかで、小柳は、Tさんが「子どものときから今日にいたるまで体験してきた民族差別に対して、場所と年月日はもちろん、あるものは人物名とともに時刻さえ正確に記憶している」ことを知らされる。そして、故郷に帰りたくとも帰れないまま寄せ場に生きるアイヌ民族の日雇労働者がほかにもたくさんいることを思う。寄せ場の現実、国内の植民地と地続きのものとしてある。それだけでなく、小柳にとっては、「Tさんのこととボリビアの「地下の民」……とが二重写しにな」っていく(同上 18 頁)。

では、なぜ寄せ場の現実が世界的な植民地と「二重写し」になるのか。キリスト者である小柳にとって目の前の現実、植民地化の過程にキリスト教が与してきた歴史への自戒と内省を迫るものだった³⁾。小柳が発する社会への告発の言葉は、同時にキリスト教の加害の歴史への告発でもある。だからこそ、釜ヶ崎における差別への抗いもまた、中南米やアイヌの人々の抵抗と共鳴していくのである。

だが、このような植民地的な共鳴と想像をもたらす力の源泉は、ただキリスト教への内省のみに存するのではない。小柳が向き合ってきた日雇労働者ひとりひとりが歩んできた足跡をたどるとき、実態としての植民地的地平が、たしかに姿を現していくのだ。この地平を浮かび上がらせるキーワードは、「棄民」である。たとえば、日雇労働者が背負わされた現実、結核がある。小柳は、1979年5月に発足した「釜ヶ崎結核患者の会」で活動した中山千夏の活動を紹介するなかで、この実態を描き出している。中山は、入院患者たち一人ひとりから人生の軌跡を聞くことにより、釜ヶ崎の労働者がなぜ結核になるのか、その原因に迫ろうとした。

医師がジン肺と判断するとつぎの活動がはじまる。ジン肺の原因となった職場の在職証明を取りよせる。主として鉱山関係が多い。なかにはすでに廃鉱になっている場合もある。(同上 212 頁、傍点は筆者)

中山の地道な聞き書きによってはじめて明らかになったのは、日雇労働者の身体の奥深くに、国内植民地たる炭鉱の傷跡がまだ蠢いているという事実であった。

それゆえ、小柳が筑豊の記録文学者である上野英信と深い交流を重ねたのは、決して偶然ではなかった。上野英信が営んだ筑豊文庫をおとずれた小柳は、通された部屋に「西インド諸島」と英語で書かれた大型の中米の地図を目の当たりにする。地図を目にした小柳は、エネルギー転換のなかで職を奪われた元炭鉱労働者を追跡した英信の記録、『出ニッポン記』の一節を思い起こす。

ヤマを追われた労働者の流浪はとどまるところを知らず、なかには最後の希望を中南米に託して、はるばる万里の潮路を渡った者も少なくない。……死にかわり生きかわり、えいえいと暗黒の地底でこの国のエネルギーをささえた「火の民」に対する、これが日本資本主義の報償であったとすれば、世界に冠たる棄民の論理もまたここにきわまりというほかはない。(上野 1977, 524-525 頁)

炭鉱を追われた棄民たちが辿りついた先は、ある者は中南米であり、ある者は釜ヶ崎であった。向かう方向は、国内か国外かで異なるかもしれない。けれどもいずれの方角であろうと、行き着く先は同じく植民地であった。かれらはともに、「棄民の論理」を背負わされた者たちなのである。

3. 棄民の政治

かくして小柳は、釜ヶ崎という「0.62平方キロメートル」の都市内植民地の内部に、国内的な周辺や国境を越えた周辺へと連なって拡がる棄民の空間の地平を掴んだ。このような空間の地平は、「寄せ場」という言葉そのもののなかに織り込まれている。「寄せ場」の由来は、江戸時代の人足寄せ場にさかのぼる。人足寄せ場は、農村の疲弊により大量に江戸に流入した無宿人の取り締まりの必要から、石川島に設営された隔離空間であった。この言葉は、農村を追われ釜ヶ崎や山谷へと流れついた日雇労働者の歴史的起源を想起させずにはいられない。

この「寄せ場」という言葉は、1960年代から70年代にかけて闘われた労働運動や越冬闘争の渦中で生み出されたものである。みずから山谷―釜ヶ崎―沖縄を流転し、1970年代初頭に手配師追放釜ヶ崎共闘会議（釜共闘）の中心メンバーとして活動した船本州治は、次のような言葉を残している。

旧社会からの汚物ではなく、帝国主義の必然的帰結にして、帝国主義が不断につくりだしているところの汚物——釜ヶ崎・山谷に代表される流動的下層労働者の、“低賃金労働力商品生産工場”は、解体された農・漁村であり、合理化された炭鉱であり、未解放部落であり、朝鮮半島であり、(日帝本国内) 鮮人部落であり、アイヌ部落であり、そして、沖縄なのだ。土地・財産・生産手段から自由な労働力商品は基本的に流動的である。さて、官許マルクス主義者諸君。そもそも、流動的ではない労働力商品とは一体何ものであるのか？(船

本 1985, 77 頁, 傍点は原文)

ここで宣言されているように、1970 年代の闘争のなかから生み出された思想は、寄せ場の労働者を「流動的下層労働者」と規定することにより、かれらの「移民=棄民」としての存在の固有性や自律性を見定めるとともに、その流動性をこそ闘争の武器に転化しようとした。さらに重要なことに、小柳にとっても、船本にとっても、「棄民」や「汚物」という言葉はおそらく重層的な相を有していた。

資本主義制度における『不良労働者』は二重の意味において追放(隔離)される。一つは不良なる労働力商品としての生産過程からの追放であり、もう一つは秩序のカクラン者としての市民社会からの追放である。(同上 56 頁, 傍点は原文)

ここで述べられるのは、労働力としての価値を奪われ、放逐された「廃棄された生」(Bauman 2004 = 2007) としての棄民の相である。この相において、棄民を取り巻く構造的暴力はもっとも熾烈を極め、かれらは「市民社会からの追放」というむき出しの植民地的暴力にさらされる。冒頭で述べた野宿者襲撃が、まさにそうであった。

このように寄せ場の思想において棄民とは、「移民」としての相と、「廃棄された生」としての相との二重性を有するものであった。双方とも寄せ場労働者が背負われた現実であるが、それぞれの相に応じた実践や言葉は異なったものとなる。「悪徳手配師追放」を掲げた労働争議や暴動が前者の実践であるのに対し、失業し路上に放逐された労働者が生き抜くための闘争としては、越冬闘争がその代表である。また、前者に対応するスローガンが「やられたらやりかえせ」であるのに対し、「黙って野たれ死ぬな」とは後者の政治の言葉としてある。寄せ場の運動は、これら双方の政治と言葉を往還しつつも、それが展開する基本軸は多くの場合「移民」の政治であった。しかし、1990 年代以降に状況は劇的に変容させられていった。寄せ場の再編が、「廃棄された生」としての棄民の相を一挙に顕在化させていったのである。

ここで、釜ヶ崎に生きた詩人の寺島珠雄の言葉を取り上げてみよう。寺島もまた、流動的下層労働者の自律的な存在にこだわりつづけた書き手であった⁴⁾。ところで、「労働者こそが未来をわがものとする労働者である」(船本 1985, 53 頁) と高らかに宣言した船本とは対照的に、寺島は未来に対しては固く口を閉ざし、ひたすら過去へと潜るのが常であった。しかしこの詩人が、珍しく将来的な下層労働者の展望をほのめかした箇所がある。

釜ヶ崎・山谷などの流動的下層労働者群の存在は、いまのところ、資本主義体制が使い棄てのために造出する安価な労働者というふうには解されている。たしかに、大筋はそうである。つまり流動は初発において可視・不可視の強制によっているというわけだ。／だが、それですべてが割り切れはしない。／主体的に流動を志向する層も、いまは明らかにある。たとえばヒッピーと呼ばれるような層、たとえばいわゆるアルバイトの継続で生活する層がまずそれだ。また、可視・不可視の強制で流動化した者のなかに、流動を主体的なものに変換している者は少なくない。(寺島 1978, 176-177 頁)

このようにして寺島は、日雇労働者が有する流動性に、資本主義が強いる可視的・不可視的な強制のみならず、労働者みずからが流動を主体的に変換するという契機を見出す。だが、寺島が「流動的下層労働者」の将来的展望を述べるとき、現在からみるならば、それはあまりに楽観的であった。

第一に、流動の主体性に対しては、1980年代に「フリーター」という用語があてがわれるようになったが、1990年代以降はむしろその用語は新自由主義的な資本＝国家の要請に従って生み出されるような、強制的自由を意味するものと化した。第二に、現代の「フリーター」や派遣労働者は伝統的に釜ヶ崎の日雇労働者が背負わされてきた現実をそのままに受け継いでおり、「日雇労働者がリハーサルをし、フリーターが本番をしている」と生田が表現する状況下にある(生田 2007. 203 頁)。ただし、この不安定雇用の拡大再生産という社会・経済的過程は、同時に空間の再編をも伴うものであった。日雇労働市場は携帯電話の「モバイル寄せ場」へと、ドヤはネットカフェやビデオ試写室といった都市に点在する消費空間へと移行させられていった。新たな寄せ場は釜ヶ崎を素通りして形成され、古くからの労働者と若い世代の労働者は、同じ境遇にありながら、別々の世界へと分断されたままである⁵⁾。かつての寄せ場労働者が釜ヶ崎や山谷といったドヤ街を流動の拠点地としたのに対し、若い世代の労働者たちにはそのような拠点すら与えられることがない。流動を主体的なものへと転化させる空間的条件を奪われたまま、かれらは、資本の命ずるままに流動を強いられる。

このように膨大な流動の下層労働者が新たに生み出される反面で、伝統的な寄せ場においては失業の嵐が吹き荒れた。日雇労働市場における求人数は、1990年をピークに急激な減少へと転じた。いまや高齢となった日雇労働者は、労働力としての価値を貪りつくされた挙句、生産過程から追放され、多くの労働者が公園や河川敷、路上や地下道といった公共空間での野宿生活へと放り出されたのである。このとき決定的だったのは、おそらく、それが寄せ場労働者から流動の主体性・自律性を奪うことを意味したということだろう。「ホームレス」という用語が安定したホームから放逐されて路上を放浪する、というイメージを喚起しがちなとは逆に、寄せ場労働者は労働市場から放逐されることで各地の寄せ場を転々とするような流動の可能性を奪われ、地面へと拘束されていったのである。したがって西澤晃彦が野宿生活を「檻のない牢獄」と表現したことは、この意味でも正確であった(西澤 2010)。さらに、このようにして廃棄された者たちは、船本がいうように、市民社会からも追放される。かれらは野宿という極限的な貧困にあえぎながら、公園や路上で市民社会からのむきだしの差別と暴力にさらされた。だからこそ、公共空間における野宿のテント村の創出は、かれらが身を守るための重要な実践となった。

上述したように、「黙って野たれ死ぬな」とは、1970年代初頭に釜共闘が編み出したスローガンのひとつであった。それは越冬闘争のような失業を生きる者たちの実践の言葉として、つまり「廃棄された者」たちの政治の言葉として生み出されたものである。このスローガンの意味するところについて、船本は次のように述べている。

七二年五月二八日の対鈴木組闘争から、その後不屈に闘い抜かれた現場闘争の中から生み出された戦闘的青年労働者の組織釜共闘が、ただ単に青年労働者の利益のために闘うだけ

でなく、資本によって労働力商品としての価値を否定された病人、老人、資本の自己増殖の過程で廃人にされたアル中たちを引き受けようとしたこと、否、彼らが参加できる形で共に闘おうとしたこと、そして、敵と対決し、打ち勝つために衣食住総体の労働者階級の問題を解決しようとしたこと、これが越冬闘争の意味である。(船本 1985, 136-138 頁)

かつて労働運動を補完するような位置づけであった越冬闘争は、いまや、寄せ場や野宿をめぐる政治の中軸を占めるようになった。このように、1990年代以降の都市における反植民地闘争は、まったく新しい位相のもとで闘われたのである。それでは、そこで問われていた政治的課題とはなにか。

4. ジェントリフィケーションと「都市への権利」

2006年、靉公園・大阪城公園において行政代執行による野宿のテント村の強制撤去が遂行された。翌2007年には、長居公園のテント村に対しても強制撤去が遂行された。このほか、目に見えにくいかたちでの排除が行われ、都市空間はあらかた浄化された。現在は、そこにかつてテント村が存在していたことが見た目には信じられないほどである。

このような2000年代の排除に対しては、幅広く抗議の声が沸き起り、反排除闘争が激しく闘われた。けれどもそこには、いまだ未解決の理論的課題が残されている。目の前にある野宿生活者の生をいかに肯定しうるのか、という課題である。公共空間における野宿生活という行為は、「不法」占拠とされる。あらゆる土地が私的所有制のもとでは私有地あるいは公有地に分割されることから、それがどこであろうと野宿生活は、原則的に「不法」であることを余議なくされる。目の前にある野宿生活者の生を肯定するということは、野宿という行為の肯定を意味し、したがってそれが「不法」とされることに異議を申し立てなければならない。つまり、土地が私的に所有されるという近現代社会の制度的基盤が根源的に有する暴力性をこそ、問わなければならないのである。

2000年代に生み出された「反貧困」というスローガンのもと、社会運動が制度的成果をあげていったことは間違いない。だが「反貧困」は、「寄せ場」という用語とは異なり、本質的に非空間的なスローガンであった。それゆえ、上記のより根底的かつ空間的な問いは置き去りのまま残されている。したがって、それはいまなお問うことができるし、問わなければならない課題である。ここで世界的状況に目を転じれば、世界の各都市で闘われた闘争の重要なスローガンのひとつは、アンリ・ルフェブルの空間論に依拠して編み出された「都市への権利」であった。2000年代以降の「都市への権利」の実践的・理論的課題とは、都市のジェントリフィケーションであり、それに対抗するスクウォット(占拠)という実践である。なにより私たちにとって重要な点は、ジェントリフィケーションをめぐる問いが、<新>植民地主義への問いを内包しているということだ。

ジェントリフィケーションの代表的論者であるニール・スミスは、その著書『ジェントリフィケーションと報復都市 新たなる都市のフロンティア』(1996=2014)において、都市への権利の理論的視角を打ち立てた。副題(原著においては主題)の「新たなる都市のフロンティア」

が示すように、スミスにとってジェントリフィケーションとは、西部フロンティアの拡張のなかで生み出されたアメリカ史の植民地的暴力が、現代都市において再現した事象にほかならない。この点は、「ジェントリフィケーション」という概念そのものに示されることでもある。この概念は1964年にルース・グラスがロンドンのインナーシティを観察するなかで生み出したものだが、そこには「ジェントリ」という土地所有者階級の名が刻みこまれている。ジェントリとは、牧草地を囲い込んで農民を放逐した主体である。放逐された農民は都市へと流入し、労働者予備軍となり、そうして勃興しつつあった都市の工業へと膨大な労働力を供出したのであった。

マルクスが本源的蓄積と呼んだこの「囲い込み」という植民地化の過程は、ハーヴェイが「略奪による蓄積」論のなかで論じるように、資本主義の前史にのみ見出されるいちどきりの過程なのではなく、資本主義の歴史と現在において何度となく繰り返される。労働者階級の居所であったインナーシティや都心からかれらを放逐するジェントリフィケーションとは、現代都市における「新しい囲い込み」(Midnight Notes Collective, 1990)にほかならない。西川が述べるように、移民と難民の世紀を経た現在、「植民地は世界の到るところに、旧宗主国や覇権国の内部においても形成される。この「新しい植民地の境界を示しているのは、もはや領土や国境ではなく、政治経済的な構造の中での位置である」(西川 2002, 27頁)。現代都市とは、植民地主義がむき出しの暴力をあらわにする「政治経済的な構造の中での位置」にほかならず、その暴力こそがジェントリフィケーションにほかならないのだ。

1990年に野宿生活者を追い出すために有料化された天王寺公園は、いまや有料化柵が無用の産物に思えるほど排除と貧民の不可視化が進められたのち、2015年の現在には再度無料化された。現在は、あべのハルカスのオープンをはじめとする再開発の熱狂に沸いている。公園の有料化から再無料化への歩みは、20余年にわたり貧民を不可視化し、完璧な消費空間を実現させる過程であったといえよう。また、2006年に野宿のテント村に対する行政代執行が遂行された鞆公園および大阪城公園においては、前者の場合その周囲はタワーマンションが林立する最先端の居住地として脚光を浴び、後者は大阪城のプロジェクション・マッピングにみられるがごとく、テーマパークとして塗り替えられようとしている。さらに、2015年4月からは、大阪城公園と天王寺公園においてはPMO(パーク・マネージメント事業)制度が新たに導入され、その運営が大企業へと全面的に委ねられることになった。公園を事実上「売り払う」といっても決して過言ではないこの私営化戦略には、土地が私的に所有されることが有する根源的な不法性と矛盾と暴力とが、すべて表わされているというべきだろう。そして、それらのすべてが、都市内において<新>植民地主義が問われるべきことを、まざまざと私たちに突きつけている。

ニール・スミスは、世界各地で闘われた1990年代初頭のスクウォットへの攻撃とその対抗運動に対し、次のような言葉を残した。

パリやロンドン、アムステルダムやニューヨークのスクウォッターやホームレス支援の活動家は、彼らがある単一の闘争を戦っているのだということを、自身の活動を通じて申し分なくはっきりと知っている。……新たな都市のフロンティアの行方は、より陰惨かつ危険なものへと塗り替わるだろう。だが、勝利することよりも敗北することが多いにもか

かわらず、スクウォッターやホームレスの人々が住宅への闘争をすぐにでも諦めてしまうような兆候は、どこにも見当たらないのだ。(Smith 1996=2014, 83-84 頁)

この闘争の一覧には、1990年代から2000年代にかけて激しく闘われた、日本の都市内における野宿という「棄民の政治」を加えなければならないだろう。そこでは、スクウォットという現代都市の反植民地闘争が、等しく闘われていた。これらの闘争は、都市の植民地主義を根底から問うものであるばかりでなく、私たちにそのような植民地主義の歴史的な再考を迫るものでもあったのだ。

5. おわりに

冒頭で述べた2012年の惨劇を思い起こすとき、そして、本稿で論じた寄せ場の思想——本稿で取り上げたのはほんの一部でしかない——を振り返るとき、重大な問題として浮き彫りになるのは「忘却」であろう。

ジェントリフィケーションは都市の階級的征服を予示している。新たな都市の開拓者たちは、都市に磨きをかけて労働者階級の地理を塗り替えることで、都市の新しい未来を先取りし正当化しようものへとその社会史を書き直す。……もともとの建築構造を抹消してしまえば、社会の歴史と地理は消し去られる。(Smith 1996-2014, 45 頁)

都市空間の物的改造と浄化は、都市の社会史の書き換えと忘却をももたらす。このグローバルな力学に抗するためにも、まず私たちは、過去の声を、積み重ねられてきた思想を、絶えず想起する必要がある。そして、このように寄せ場の思想を辿るとき、その場所が本来的に有する空間性に、私たちははじめて気づかされる。それらの思想は、釜ヶ崎という場所の内奥に、国内外の植民地をつなぐ世界的地平を掴もうとしていたのだ。

ところで1990年代以降、労働市場としての寄せ場は「デジタル寄せ場」へと取って代われ、それとともに労働者の流動性は急速に奪われつつある。そのことによって、移民＝棄民の移動をつうじて結びあわされる釜ヶ崎の關係的空間性が断ち切れ、もはや自明とは言い難くなっていることは確かだ。だが、実態としての流動性や關係性が失われたからといって、国内や世界各地の植民地と共鳴するような釜ヶ崎の想像力もまた不可避免的に失われる、などと結論してはならないだろう。たとえば、「釜ヶ崎結核患者の会」の実践を思い起こすとよい。かれらは、労働者一人ひとりから人生の軌跡を聞くことによって、そこから筑豊－釜ヶ崎をむすぶ線を見出していったのである。労働者の人生史に耳を傾けることによって場所の想像力を取り戻すことは、現在でも決して不可能なことではない。

また、このような記憶の忘却／想起への問いは、空間の可視化／不可視の問題と密接不可分であることを忘れてはならないだろう。地図とは、なにかを明るみにすると同時に、なにかを覆い隠すものである。一方では、昨今の釜ヶ崎は「西成特区」として指定され、これまでになくメディアの注目を集めるようになった。それゆえ、地図上で釜ヶ崎の位置を目にする機会も

数多い。だが、そのように地図の平面上において明るみになればなるほど、釜ヶ崎という場所が本来的に有していたはずの国内的かつ地球的な相互関係は、むしろ不可視化され、忘却されてしまう。他方、社会の只中において「総寄せ場化」といわれる事態が着々と進行しつつあることは、指摘されるようになってすでに久しい。だが、その空間的実態は、いまだ十分に可視化されず、不透明なままである⁶⁾。新たな寄せ場がいかなる空間的実態を伴って生み出されつつあるのかを探究することは、おそらく、寄せ場の思想が積み重ねてきた世界規模の植民地的共鳴を再構築するうえで、欠かせない作業であるはずだ。

このような課題に取り組む上でキーワードとなるのは、やはり「棄民」ではないだろうか。現代都市の〈新〉植民地主義が、より大量の棄民を必要とし、生み出していることはもはや確実であろう。たとえば、かつて寄せ場の労働者が被ばく労働を強いられたように、3・11後の状況下においてより多量の労働者が除染作業を含めた原発関連の労働に動員されつつある。あるいは、2020年の東京オリンピックを実現させるためには、労働力をよりいっそう多量に動員することが欠かせないだろうし、労働者をいかに使い捨てるかはすでにおおびらに議論されている。それは、1970年大阪万博の開催のために多数の日雇労働者が移民＝棄民として動員され、その後かれらが「廃棄された者」として放逐されていった歴史を想起させずにはいられないはずだ。

都市の公共空間を占拠し、ジェントリフィケーションに対抗するという実践は、もっとも先鋭的な「棄民」の政治としてある。それは、資本主義が本来的に有する本源的蓄積や植民地主義の暴力を、根底から問うものである。さらには、現在そして過去の「棄民」のありようを想起することを、私たちに否応なく迫るものでもある。「植民地主義を批判的に問うことは、国民国家と資本主義の両者の変容を、さらにはその共犯関係がもたらす差別と搾取の歴史を根底から問うことになるだろう」（西川 2006, 30 頁）。西川が託したこの言葉を、いかに受け継いでいくことができるのか。膨大な棄民が生み出され、放逐されつつあるいま、それは差し迫った課題として私たちの眼前に突き付けられているのではないか。

注

- 1) 『毎日新聞大阪市内版』2012年11月9日。
- 2) 2014年8月、ミズーリ州ファーガソンにおいて、武器を持たない18歳のマイケル・ブラウンが警官により射殺された。同年7月のニューヨークでは、警官による「チョークホールド」（首締め）の取り締まりで黒人男性エリック・ガーナーが死亡。2015年3月には、ロサンゼルススキッドロウにおいて、ホームレスの黒人男性が、やはり警官により射殺された。
- 3) たとえば、1493年にはじまる西インド諸島での世界宣教という植民政策に対し、スペイン世界の内側から40の命題をもって批判した修道士フランシスコ・ア・ヴィクトリアの理論と実践を論じたのち、小柳はこう締めくくっている。「ビクトリアの命題に日本の歴史を重ねながら、皇帝や教皇の代わりに天皇を、「野蛮人」（異邦人・異教徒）をアイヌ民族、沖縄、朝鮮、アジアの人々と読みかえてみたら、どうなるでしょうか」（小柳 1993, 40 頁）。
- 4) 1960年代後半に「労務者」という表現を日雇労働者に対する差別として告発した寺島は、しかし、1970年代に入ると一転して「労務者」であることを肯定した。そうすることで、市民社会へと包摂されえぬ寄せ場の自律性を記述し、確保しようとしたのである。
- 5) 2007年にネットカフェに宿泊する不安定就労者の調査に携わり、以後かれらの就労・生活支援に携わっ

てきた沖野充彦によれば、「同じ不安定な居住状態に置かれていても、建設日雇を経験しない派遣や非正規の若者たちが、釜ヶ崎に入って助けを求めることは想像以上に難しかった」という(沖野 2015)。

- 6) 「社会の総寄せ場化」とは、あたかも寄せ場が「サイバースペース」に融解したかのような印象を与えがちである。だが、ひとりひとりの労働者が物的な身体を有した存在である以上、かれらはどこかの場所を占めなければならない。また、労働力とは身体を有した存在である以上、からはなんらかのかたちで、どこかの空間にプールされていなければならないはずだ。

文献

- 生田武志『＜野宿者襲撃＞論』人文書院, 2005.
- 生田武志『ルポ 最低辺——不安定就労と野宿』筑摩書房, 2007.
- 上野英信『出ニッポン記』潮出版社, 1977.
- 沖野充彦「OSAKA チャレンジネットの終了と希望館の次の一步」大阪希望館 News, 2015年3月2日 (<http://osaka-lsc.jp/kiboukan/info/941.html>: 最終閲覧日 2015年3月19日).
- 加藤政洋「都市編成と「植民地なき植民地主義」」『立命館言語文化研究』19 (1), 117-129, 2007.
- 小柳伸顕『風と大地と太陽と——アイス, 中南米, 釜ヶ崎との出会い』日本基督教団出版部, 1993.
- 寺島球雄『釜ヶ崎——旅の宿りの長いまち』プレイガイドジャーナル社, 1978.
- 西川長夫『戦争の世紀を越えて』平凡社, 2002.
- 西川長夫『＜新＞植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社, 2006.
- 西澤晃彦『貧者の領域——誰が排除されているのか』河出書房新社, 2010.
- 船本洲治『黙って野たれ死ぬな——船本洲治遺稿集』れんが書房新社, 1985.
- Bauman, Zygmunt., *Wasted Lives: Modernity and its Outcasts*, Policy Press, 2004 (= 2007, 中島義男訳, 『廃棄された生——モダニティとその追放者』昭和堂).
- Harvey, David., *The New Imperialism*, Oxford University Press, 2003 (= 2005, 本橋哲也訳, 『ニュー・インベリアリズム』青木書店, 2005).
- Midnight Notes Collective, 'Introduction of the new enclosure', *Midnight Notes* 10, pp.1-9, 1990.
- Smith, Neil., *Uneven Development: Nature, Capital and the Production of Space*, Oxford: Basil Blackwell, 1984.
- Smith, Neil., *The New Frontier: Gentrification and the Revanchist City*, Routledge, 1996 (= 2014, 原口剛訳, 『ジェントリフィケーションと報復都市——新たなる都市のフロンティア』ミネルヴァ書房).

